

日米高校生 ネットの絆

NPO6年

半年間交流 延べ6500人

2011年の東日本大震災をきっかけに芦屋市出身の女性によって米国で設立されたNPO法人が、インターネット上で日米の高校生が半年間にわたって交流を重ねる活動「グローバル・クラスメート」に取り組んでいる。6年目を迎え、参加者は延べ約6500人に達し、絆の輪が広がっている。

東日本大震災契機 芦屋出身女性設立



米国から届いたプレゼントを手に、お礼のメッセージを撮影する生徒たち（大阪府東大阪市の近畿大付属高で）



NPO法人は「キズナ・アクト・ス・カルチャーーズ」。本語を学ぶ米の生徒らがネット上の専用掲示板を使い、週1回交流。「好きな音楽」「学校紹介」などテーマを設けて日本語と英語で書き込み、写真や動画も載せて話題を広げる。インターネット電話「スカイプ」で交流することもあった。初回は12年9月からの半年間で岩手、宮城、福島3県と米の高校各13校がペアを組んで交流。「相手の文化への理解が深まった」と好評で、13年以降は東北の高校を優先しながら対象を全国に拡大させた。

同法人は今後も交流の規模を拡大する予定。スマサーストさんは「手軽に取り組める国際経験を通し、つながりを深めることが将来にも役立つはず」と話す。

スマサースト文子さん(38)は「写真」が設立し代表を務める。07年、米国人との結婚を機にワシントンに移住し、日本で語学を指導する米国人を派遣する事業に携わった。東日本大震災の被害に衝撃を受け「被災地の高校生に夢を持ってほしい」とネットでの交流を発案。日本で語学教師の経験がある米国人らと協力し、プログラムを作った。

英語コースなどで学ぶ日本の生徒と、選択科目で日

2月の6回目は、両国各31

校の計約1700人が参加している。

初参加の近畿大付属高（大阪府東大阪市）はカリフォルニア州のクパチーノ高と交流。11月上旬には雑貨や菓子などプレゼント交換があり、生徒たちは動画で感謝の気持ちも伝えた。

2年生の北野美咲紀さん（16）は「ネット交流は参加しやすく、同世代の外国人と知り合えたことはい経験になる」と喜ぶ。

今夏には日米の参加者の代表12人がワシントンで直接交流。東日本大震災の発生時、在日米大使館の首席公使だったジェームス・ズムワルト氏が講演し「大使館のスタッフらはどうしたら力になれるかを心から思い、激務をいとわなかった」と振り返り、生徒たちも日米のつながりを実感したという。

同法人は今後も交流の規模を拡大する予定。スマサーストさんは「手軽に取り組める国際経験を通し、つ